

# 書評 Silvia Mantini,Lo spazio sacro della Firenze medicea,Firenze,1995

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Ishiguro, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00001235">https://doi.org/10.24517/00001235</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



Silvia Mantini, *Lo spazio sacro della  
Firenze medicea*, Firenze, 1995

石 黒 盛 久

I

私事から稿を起こすことを許されたい。筆者は昨年春に至る三年有余イタリアに遊び、フィレンツェ大学文哲学部の史学科に籍を置いた。フィレンツェ・ルネサンス研究現今最高の碩学R・フビーニ教授（一六世紀の政治文化に専ら関心を寄せる筆者が一六世紀フィレンツェの諸問題と、先行する一四、一五世紀のそれとの緊密な連関に開眼されたのは、同教授の緻密極まりない講義を通じてであった）トスカナ近代史講座の担当者でメディチ権力による政治プロパガンダ政策に関心を持つG・チプリアーニ氏はじめ、講義を聴講し学恩を蒙った先師は数多かつたが、社会人類学的な道具立てを駆使しつつ、予想外の近世史像を華麗に描き出すその学風に多大な関心を寄せ乍ら、遂にその警咳

に接するを得なかったのが、同大学の近世史講座の正教授S・ベルテッリ氏であった。氏との邂逅の機を敢えて求めなかったのは、歴史学の言わば「清流派」に属する友人イタリア人学徒達から、その悪口を耳に章魚が出来るほど聞かされていた事にも因るが（ベルテッリ教授の「大胆すぎる」論法には辟易しているという風情であった）、加えて自分の都合に従い始終勝手に講義時間を変更する、天才肌の学究にありがちな学生との接し方に、自分の勉学ベースを攪乱されることを危惧した為でもあった。

しかし曾遊の地に永の別れを告げた今日、筆者の深い悔恨の種は、ベルテッリ教授と接触し、同教授から今後の自身の研究方向に関し、些かなりとも助言を求める事が出来なかつた処にある。留学半ばにして方針を転換し、メディチ王朝の「政治文化」を研究対象に選択した筆者が、この

分野に関する研究をばつぱつ読み進める内に見出だしたのは、就中筆者が関心を抱く（舞台の上の権力）としてのメデイチ国家儀礼の形成が、①近年幾人かのイタリア人若手研究者により、歴史学の問題として真正面から取り上げられ始めている事、②彼らが挙げてベルテッリ門下に薫陶を受け、同教授の大作『王の身体』に着想の根拠を据えている事、③ベルテッリ教授自身も学生たちのこうした動きに答え、彼らの著作の緒言などに触れられるように、若書きの論文・著作の刊行に尽力し、今や彼の周囲にメデイチ宮廷の政治文化研究の一つの学派が形成されている事であった。<sup>3)</sup>

前置きはここ迄として以下紹介・批評を試みるのは、このベルテッリ門下の若手研究者の一人シルヴィア・マンティエニの近著『メデイチ・フィレンツェの聖なる空間』（"Lo spazio sacro della Firenze medicea", Firenze, 1986）である。書評の定石通りここは著者の略歴紹介となる段ではあるが、著者マンティエニについて面識がある訳ではないので、本著表紙裏の略歴記載に頼る他は無い。それによればフィレンツェ大学卒業後、フィレンツェ大及びピサ大に於いて開講された「ヨーロッパ社会史」研究博士課程に就

学、この間バリの高等研究院やロンドンのワールブルク研究所に於ける研究活動にも従事し、これらの研究機関に集う各国第一級のルネサンス研究者と面識を得た。この時期行なわれた一連の研究が彼女の博士号取得論文へと結実し、本書の原型をなす事になる訳だが、その上に及ぼされたベルテッリの手法の影響の大きさは、「歴史研究に対する熱意・情熱はこれを偏にこの師に負うものである」（本書緒言）という彼女自身の告白からも十分に窺える。現在はアークイラ大学講師。主な業績としては『ゴスタンツァーサン・ミニアートの魔女』（F・カルディーニ編、一九八九年）、『夜』（M・スブリッコリ編、一九九一年）、『〈女性〉のルネサンス』（O・ニッコリ編、一九九一年）等の論集への投稿があるが、カルディーニ、ニッコリといった一連の編者名からも著者が、従来の文献史学を乗り越えようとするイタリア史学界の新しい潮流へと棹差しつつ、その研究活動を展開している事が推測される。<sup>3)</sup>

著者のかかる略歴を踏まえ叙述を本書に戻せば、形成途上の新興学派に属する俊英の、事実上の「処女作」とそれを性格づける事が出来よう。こうした性格を有する著作には、単に著者自身の研究様式と言うより、彼の属する学派

全体を支配する研究上の「癖」とでも言った方が良いものが、長所・短所両面に亘って露呈することが多いものである。本稿に於いても著作自体の内容紹介は勿論、背後に読み取れるかかる学派的側面をも等閑にせず論を進めるべきであるが、先ずは枠組として目次を提示、続いて各章の解題へと移り、最後に総評として本書の長短を、学派流儀の長短との絡みから勘案して行く予定である。

## 目次

### 序論

### 第一部

第一章―形態論的前提としての中世における区域分割

第二章―一四世紀フィレンツェにおける「聖なる」空間

第三章―〈共和主義的〉聖母とその祭列経路：インブル

ネータの聖母

### 第二部

第一章―フィレンツェ第一共和国(一四九八―一五二二)

と終身統領制時代

第二章―「占有」された都市：メディチ一門と都市空間

の再征服

第三章―〈メディチの〉聖母：下僕たちの聖母或いはサ

ンティッシマ・アヌンツィアータの聖母

実を言えば各章は探求される問題毎に更に小区分され、各々の「見出し」も読者各自の参照の利便の為原著目次に明示されているが、その引用は繁を避けるためここでは省略する。但し内容解題に取り掛かるに先立ち、目次から窺える本書全体の構成について一言しする必要はあろう。

冒頭序論、先ず以て著者の依拠する方法論の由来が、上述各章の概要見通しと共に簡潔に提示される。本書主要部は第一部―第二部の二部構成を成すが、その分量から言っても各々第二章がその中心たることは疑う余地が無い(第一部第二章一〇三頁/第二章六九頁)。第一第一章及び第二章第一章は夫々、各「第二章」への導入の機能を果たす。後に詳論するが第一部第二章が、アルビッツィ家の全盛時代からメディチ家の「最初の追放」(一四九八)に至る所謂「寡頭制支配」時代に於ける、中世共同体的都市空間(第一部第一章において概説)の再編成をその主題とするのに対し、第二部第二章に於いては、一五二二年の復辟以後「同等者中の第一人者」の限界を乗り越え、絶対専制君主への道突き進みはじめたメディチ家が、前世紀に

完成された都市秩序を自己本位に改造して行った過程が詳論される。総評で批判するが、興味深い問題提起を多々含みながらも、逆に問題提起の多彩さ故に本書の論旨は決して明晰なものとは言い難い。この様な叙述様式をもつ著作に取り組む場合、予め目次を熟考し確固とした「見取り図」を頭に入れておく事が、次々と繰り出されて来る具体的事例の海の中で遭難しない為、是非とも必要な予備作業と考えられる。第一部／第二部間のかかる鏡像構造は夫々の終章が、〈共和主義的〉聖母並びに〈メデイチの〉聖母を取り上げる事に於いて一層明瞭に示される事となる。寡頭共和主義の守護者としての〈インプルネータの聖母〉崇拜が、メデイチ王朝の守護者〈サンティッシマ・アマンツィアータの聖母〉のそれに取って代られる過程に、寡頭貴族政から絶対君主政への都市象徴空間に於ける変転の、集約的表現を著者は視るものの如くである。

## II

前述の如き全体構成を踏まえ、続いて各章の紹介に及ぶ訳であるが、言う迄も無く拙論は書評であり、多彩な問題提起の一切に筆を及ぼす必要はこれを認めない。本書全体

を貫く方法論に言及しつつ、各章の予備的概括に力点を置く「序論」の内容整理を軸に据え、それを補足する形で後続各章各段の論旨へと論を繋げて行きたい。

開頁一番本書発想の原点が、R・C・トレクスラーの『ルネサンス・フィレンツェの公共生活』（一九八〇年）にある事が明言される。これは別に異とすべき程の事では無い。親子・兄弟・友人関係に始まるフィレンツェ社会の「社会結合」の全様相を配慮しつつ、そうした諸結合の集約表現たる〈儀礼／政治〉を、一つの相関的過程として把握しようとするトレクスラーの試み（背景にはかかる発想を基軸に、バリ伝統国家の社会構造を分析したC・ギアーツの業績が看取される）は、我が国史学界に紹介される事少ないが、一五世紀フィレンツェ社会を主題とした近年欧米の諸研究に於いて、分野を問わず必ず言及される重要著作の地位を占める<sup>③</sup>。確認して置きたいのは、「歴史家」マッティーニがトレクスラーから学び採ろうとしているのが、公的儀礼を美術史や演劇史、建築史の素材としてではなく（かかる視点からの「祝祭空間」フィレンツェの探求は枚挙に暇がない）、「社会的合意、乃至は公的正当化追求の闘争を理解する為の」《脚本》、「優越性即ち『自身のイメー

ジの誇示」の〈獲得〉や支配階層との〈連関〉、ひいては官職やより一般的に言えば政治生活への参入を自指す〈ネットワーク〉を考察する為の」《梓組》として、了解しようとしている点だと言う事に他ならない(本書一三一―一四頁)。

基本的問題意識をトレクスラーと共にしつつも、マンティニの研究に独自の視点があるとすれば、幾つかのランド・マークの複合系としての「都市景観」の〈持続／変容〉のプロセス中に、この問題を捉え直そうとした処に在る。そしてこの考察を通じ必然的に浮かび上がってきたのが、メディチ権力の成立―強化に対応した、「都市景観」のメディチ本位の変容―再編成という現象であった。それは彼女が、本論第一部第二章と第二部第二章の比較作業を介して明らかにしようとした如く、表層ランド・マークの支配からランド・マーク統合の《文法》の支配へと、時と共に徹底化された(つまり儀礼史の観点よりすれば、この象徴支配の〈表層〉から〈深層〉への浸透過程が完了した時、「事実」としてのメディチ支配はよりトータルな「現実」としてのメディチ支配へと脱皮したのである)。そして一五世紀から一六世紀に及ぶこの過程の考察こそ、自身の課題を一五世紀(盛期ルネサンス)に限定したトレクスラーのや

り残した仕事でもあった。

もっとも本書(就中第一部第二章、第二部第二章)でマンティニが言及した、一五一―一六世紀の移行に係わる儀礼諸現象の大半は彼女独自の史料調査に依るものではなく、トレクスラーに加えブラッカー、ストロッキア、テスタヴェルデ、ピエトロサンティそしてベルテッリ等の著作の内容の切り張りに過ぎない(勿論相当適切な要約であり、これらの先行著作内容を手早く習得することが出来るという点で、参照し易い「手引書」としての利点も又本書にはある)。そうしたパッチ・ワークの中において著者ならではの論点として注目すべきは、①一四世紀末から一六世紀中葉に及ぶこの時期、フィレンツェ貴族層による「建築ブーム」の波の循環が何度か見られた事、②こうした「ブーム」の盛衰が都市内部に於ける政権隆替と密に連動した事、③一般的に「ブーム」の波とは別に政権中核との距離に依じて、土木事業を起し得る貴族集団と起し得ない集団の間の、選別が進行していたこと、④盛期中世に完成した都市構造は一五世紀にも根本的改変を視る事無く、寧ろその寡頭貴族階級本位の運用に都市政策の力点が置かれていたが、一五四九年ピッティ宮購入に始まるメディチ宮廷のアルノ対

岸邊座により、都市の主要ランド・マークたる貴族の宮殿群の分布法則に本質的変化が生じたこと、⑤宮殿分布法則の変動はその背後の、宮殿群の存在を支える社会構成の変動を反映していること、等を明らかにしている点であるか。この様な視点も、ゴールドスウェイトによる一五世紀フイレンツェの都市景観の形成を取り上げた業績の、延長に位置するものに過ぎないとは言え、ゴールドスウェイトの視座（都市建設の社会史）を先に挙げたトレクスラー的視座（社会結合の網の目を通じて産出される権力）と交差させた処に、一体何が見えて来るかという意識に、本書に詰め込まれた過剰な論点を有機化する、結晶点を見出だし得るようにも感じられる。もっともこの様な二つの視点接合の試みが必ずしも成功していないため、『聖なる空間』と題されているにも係わらず、先行研究の蓄積のある儀礼論への傾斜が過度となり過ぎた点は今後の課題であらう。

勿論都市空間を問題とする著者が、王侯の入城式を始めとする聖俗の国家儀礼に多くの記述を割かねばならなかったのには、理由が無い訳ではない。都市空間を構成するのは先ず以て、その構成要素たる各ランド・マークに他ならないが、ランド・マーク設営点は偶然定位されるものでは

なく、そこを意味論的特異点として産出する背後の文法構造Ⅱ都市空間を空間として在らしめる（天地創成神話）の解説を介して定められる。換言すればランド・マークの印された地点が意味特異点となるのではなく、宇宙Ⅱ都市開闢神話に応じ意味特異点と定位された地が、然るが故にランド・マークを通じての自己開闢を要求するのである。斯くして都市に分布するランド・マークの体系は、宇宙産出文法の静的側面を表す事になるのだが、他方儀礼取り分け祭礼行列が神話世界の演劇的反復として、同じ文法の動的側面を示す事は今更言う迄もあるまい。祭列はそれ自身の内部において演劇的進行（時間）の次元を有するが、かかる進行は行列が順次訪う「留」（ランド・マーク／空間）との相互作用に依り実現する。換言すれば同一文法（構造）の静／動両面として、行列とランド・マークは一方が他方の機能／意味を照射する。従って都市空間の歴史的意義を論ずる者が、その内部に繰り広げられる宇宙儀礼（宗教的儀礼がのみならず、祭政一致の起源において政治的儀礼も又同様の由来を潜有している）に踏み込むのも頷けない訳ではない。だが繰り返し批判すれば、ゴールドスウェイトの視座とトレクスラー的視座の交差点にマンティニーが

独自の視座を定めたと認めるならば（この交差中に「聖なる空間」なる概念が浮き出る）、ルネサンス・フィレンツェの諸儀礼の叙述への戦略を欠いた疑惑が、本書を一読何処に主意があるかを疑わせるが如き、曖昧なものにしてしまふのに一役買っていたことは否定し難い。

### III

果てしない抽象的議論に付き合うことに、読者の多くが物憂さを感じておられる頃おいと思う。何度も予告したように、各章毎の具体的内容紹介へと筆を進めたいが、残された紙幅の関係から言っても、又素材を繪花的に提示してみせる著者の叙述法からしても、代表的論点のざっと駆け足の紹介に留らざるを得ない。勿論彼女が取り上げた豊富な論題の夫々が、読者各自の研究主題と幸福な出会いをする時、そこに読者が予め思いも寄らなかつた史の新世界が開けることを評者は信じているし、それ故にこそ細部の不満を度外視して本書推奨の筆を執つた訳であるが、マンティーニの発想の鋭さ（それが時に上辺りなものへと流れて了うにせよ）と読者との出会いは、これを各自の読書経験に任せられた方が賢明であろう。我田引水とは言い条本書評の価値

は、原書の夥しい個別論題を一貫する基本視角を前節において引き出した、「深読み」（誤読すれすれ或いは創造的誤読に近いものではあるが）に存すると評者は自認している。しかし一つの手引きとしてこの「深読み」のみを提示し、それと各自の読書を繋ぐ具体的な内容紹介を欠いては、書評として不十分の誇りを免れまい。

方法論的考察を主軸に据えた序論については前節に仔細に触れた。続く第一部は著者自身の言に依れば、「都市編制成形についての伝統的範型を再現し、古代―近代の持続性を確立する」〈設計図〉に即しつつ、「創建儀礼、境界設定、都市空間の配分」と連関する、あらゆる要素・概念を検討する（本書二二頁）。「創建以来中世全期に亘る（都市センター）群発展の過程」を追体験することは、相互対照による分析を通じ主題的に取り扱われる、一五世紀「諸権門」の競合：第一部第二章／一六世紀「メディチ家の勝利：第二部第二章」間の都市の構造転換を、その「形成諸段階に沿って、その内的配分の選択に沿って、時勢に伴う都市空間の変容に沿って、都市形態に秘められた概念や理論に沿って」―現実／象徴両次元に亘り―理解する為不可欠の前提となる（本書二二頁）。



この様な見通しを背景に、第一章では都市形成の原（設計図）とも言うべき、「フィレンツェの神話」創出に歴史的に参与した諸要素が、ランド・マーク設定の原参照境界線との連関の下に考察される<sup>⑧</sup>。他の古代諸文明人にとつてと同様、古代ローマ人にとつても城壁Ⅱ都市建設は、宇宙開闢以前の混沌に秩序の（境界）を刻印する、世界創世の神聖行為と理解されるものであった。かかる観念は中世社会にも継承され、聖（文化）／俗（自然）の象徴的境界としての城壁侵犯は、各自治都市の都市法により最高度の重罪と規定されると共に、城門の開放或いは一部城壁の自発的破壊は、都市を訪問する貴人やそこを征服した戦勝者に対する、至高の謙讓表現として機能することもあった<sup>⑨</sup>。他方象徴的 境界線としての城壁は、文化を混沌へと還元する（外部）の邪悪なる諸力の脅威に不断に曝されており、従つて城壁の象徴的防御力をいやが上にも強化すべく、城壁と相関する各所（就中城門更には城門と都市中樞を連結する街路）に靈的ランド・マーク（教会、修道院、礼拝所、聖像・聖画）を配置する事が、中世都市国家の象徴都市政策の基本文法を構成する。

城壁により境界設定された聖なる（境界）：中世都市に

共通するこの観念は、城壁の創建・再建の半ば伝説的な「歴史」と統合されることにより、中世ールネサンスのフィレンツェ精神文化を支配した「フィレンツェの神話」なる、特異な政治イデオロギーへの変貌を遂げる。即ち城壁の創建者をカエサル（乃至は時代によりスラヤアウグストゥス）、再建者をシャルルマーニュ帝と断定することを通じ、この新興都市は自らの命運を至聖なるローマ帝国と連結し、剩え「第二のローマ」の地位すら要求し始めたのである。盛期中世の「高度経済成長」を基盤に、その国際的地位を急激に上昇させたこの都市の要求は止まる処を知らない。古代中国と同じくこの時期西方にも、理想都市を天円／地方の聖なる二重範型に沿つて造形せんとする意志が確かに存在した（マンティニーは中世フィレンツェを描いた様々の図像に依り、この事実を証明しようとしている）。方形城壁による「第二のローマ」理念が後者を表明することは当然として、中世都市論に於ける聖なる円形の範型となつたのは、ヨハネ黙示録が詳述する「天上のエルサレム」に他ならなかつた。一四世紀初頭経済繁栄の頂点に達したフィレンツェは、「天円地方」の理想都市としての自負に満ち、神に選ばれた「新たなるエルサレム」たる事すら標榜し始

めた。そして「第二のローマ」と「新たなるエルサレム」という二つの政治イデオロギーは、時に対立し時に共鳴し合いながら、その「事実上」の支配に聖性の次元を付与せんと苦闘する各時代の都市統治者に利用され続ける事となる。<sup>10)</sup>

さて第一章では都市編制の〈設計図〉としての「フィレンツェの神話」が、聖性の根源としての〈聖なる城壁〉との連関から論じられたが、続く第二章に於いては「聖なる政治権力」獲得を目指し競合する諸《権門》による、かかる神話を通じ形成された都市構成文法変成過程の考察が、盛期ルネサンス（一五世紀）を通じての①国家儀礼と私的儀礼の葛藤、②都市区分の党派的再編制、③宮殿の分布と造宮数の増減、④宗教施設の配置等を題材に繰り広げられる。

①国家儀礼と私的儀礼の葛藤―教皇や皇帝を始め、汎欧州的な要人の訪問相次いだこの時期初めて、単なる都市共同体ではなく主権国家としての国家儀礼が出現するが、こうした儀礼出現の背景には単に儀礼の次元に止まらぬ、私権と公権の葛藤という、中世から近世にかけての欧州史の主軸を成す大問題が控えている。中世国家の構造を概括す

れば、諸権門・諸団体の私権の一大集積体という他なく、〈公〉とはこれら相矛盾し合う私権相互の調整機能の謂に他ならなかった。この性格を克服し、自らを諸私権の上に超越するものたらしめることが、内には中央集権化を、外には領域国家の確立を推進しつつあった、近世初頭各国公権の課題であったが、そうした作業の貫徹は逆説的にも一権門の他権門に対する決定的優越⇨公権の全面的家産化により達成されるものであった。国制史のこの過程の典型例がフランス王国であるが、フィレンツェにあっては公権の私権からの独立は、結局は私権のメデイチ一門への、次第に強化され行く集約を担保として初めて可能となった。

本章冒頭においてマンティーニは、ストロッキアによるルネサンス期フィレンツェの葬儀研究を踏まえ、大略以上の議論を念頭に―或いはかかる現象の視覚的反映として―一五世紀全般に亘るフィレンツェ儀礼史を展望すべき事を主張すると共に、<sup>11)</sup> 続く幾つかの節に具体的素材として（ア）教皇の入城儀礼（マルティヌス五世、エウゲニウス四世）、（イ）司教の入城儀礼、（ウ）世俗王侯の入城儀礼（皇帝フリードリヒ三世、ミラノ公爵等）を検討する。この検討がベルテッリの著作に依拠したものであることは明らかであ

るが（謙讓礼としての城門の解放、都市創建儀礼の反復としての行進経路）、中でも注目したいのは来客の身分位階に対応する形で、政府が送迎ポイントの厳密な階層構造を設定していた点であろう。或る者の場合には使者を城門外まで派遣し、或る者の場合は遣使を城門に止め、又或る者に対しては政府宮玄関の出迎えのみを行なうのである。この差異が派遣される使者の位階勲等と組み合わせられ、一層複雑な体系と化すことは言う迄も無い（就中「國務委員」が送迎に加わるか否かは極めて重要な差異であった）。この階層構造が注目に値するのは、それを通じて今や都市の構図が、価値の起伏に彩られたものとして浮かび上がってくるからである。この価値の密度は一般に、社会生活の中心（この場合は政府宮）から外辺へと次第に低下して行くものであるが、一方古の聖なる城壁上に政府宮のみならず警視庁（バルジェッロ）、大聖堂など社会生活の中心として、高い価値充填度を示す機関が分布し、その一つ一つを〈留〉として、行列が通過して行く事を勘案すれば、行列経路を追跡しながら、都市空間をより複雑な価値密度の高低図として描き出して行く事も可能であろう。

② 都市区分の党派的再編制―既に中世からフィレンツェ

の権門諸族は夫々、都市の一定区画に氏族全体として集住していた。その核を成すのは宮殿であるが、加えて集住地に自身の後援下、教会・修道院を造営したり、既存の教会に一族の礼拝堂等の寄進を行なうことにより、中世社会の人的交流の結節点たるこれら宗教施設との連携を深め、自己の支持基盤の拡大を目指していた。教会との関係強化は各権門に、教区に付属する聖職祿を世襲化し、教会財産をコントロールする可能性や、教会の不輸不入特権を抜け道とした脱税の方途など、数々の経済的便宜を供与したのみならず、教会傘下の信心会その他の互助組織への影響力行使を通じて、地縁原理に基づく新たな支持基盤を発見させたのである。この様な地域支配の延長上各権門は、「組合」と並ぶフィレンツェ政治の地縁的基本単位たる一六「旗」の支配、更にはその上部組織四「街区」の支配を達成する。サン・パンクラツィオ地区に勢威を張ったルツチェライ家、そしてトルナヴォーニ通りに面した壮麗な邸館を中心に勢力を拡張したストロツィ家等、自身の勢力範囲を有さぬ有力家門は無かったが、当時未だ開発の余地の十分あったサン・ジョバンニ区就中金獅子「旗」に着目し、メディチ宮、サン・ロレンツォ寺院、サン・マルコ修

道院、サンティッシマ・アヌンツィアータ教会と次々とランド・マークを形成しつつ、ここに一大メディチ地区を作り上げたのが、大コジモ以降歴代のメディチ家に他ならない。この様に出現したランド・マークの幾つかは、極めて自然な形で旧来の中心ランド・マークの体系に挿入されて行ったが（取り分け祝祭行列経路設定に際して）、メディチ権力の強化と共に、政府宮や大聖堂といった旧来の中心ランド・マーク複合に自覚的に対立する、新たな中心ランド・マーク複合として自身を浮上させて来ることになる。

③宮殿の分布と造宮数の増減―上記の如く各権門が夫々支持基盤を都市内に確保せんと努める以上、所謂屋敷町の成立など問題にもならない。夫々の勢力範囲は別名「島」と名付けられる様に社会の各階層を揃えた、自立空間を形成していたものと思われる。ところでマンティニーの見解に依れば、一四五三年コジモの権力掌握前後、フィレンツェは宮殿建築ブームの渦中に在ったと言う。未だどの権門も「同等者中の第一人者」たり得る可能性を有したこの時期、各権門は夫々の統合の核とも、勢威の象徴とも見做し得る宮殿造営に熱意を燃やしたし、当初不安定な権力基盤に立っていたコジモも、こうした流行を抑圧する危険を冒すつも

りはなかった。この潮流に変化が見られるのは凡そ、一四五九年以降の事だとマンティニーは指摘する。都市内の建築事業の総数低下の一方、この時期の宮殿施工主がメディチ派有力者に集中している事は、彼女が紹介する史実からも明瞭である。著者マンティニーはこの事実を、一四五八年の親メディチ派「大権機関」の設立と関連させて解釈する。即ちこの年初めて官職候補者名簿が、政府宮ではなくメディチ宮において作成されたが、それは市政府権力の空洞化／メディチ権力の実質強化を示唆しており、各権門の勢威の象徴たる宮殿造宮数の減少／メディチ派有力者への集中も又、メディチ権力による宮殿建築統制政策の結果と推測し得るのである。

#### IV

一〇三頁に及ぶ第一部第二章の論題が以上で尽くされた訳ではないが先に進もう。④宗教施設の配置については、その社会権力編成ネットワーク内に於ける意義につき、②に關わる論点との絡みから既述したので詳論を省く。だがこうした宗教施設が象徴次元においては、フィレンツェ国家の聖性の根源たる「聖なる城壁」より流出する呪力の統

御を目当てに、都市内を貫流する靈力の経路結節点毎に配置されたことを考えれば、聖なる権力の獲得を目指す各権門が、斯様な宗教施設をも包含しつつ、都市空間の再編成を単に機能的側面のみならず、象徴論的側面からも貫徹するに努めた事を見落としてはなるまい。<sup>15)</sup>

第二部第二章は六九頁という分量から言っても、第一部第二章と並ぶ本書の主軸を為す部分であると共に、IIに触れた如く、寡頭貴族政の表面的持続に於いて完成された一五世紀の都市空間―儀礼空間が、一六世紀初頭以後展開するメデイチの絶対君主化の過程と共に如何に根本的改編を蒙ったかという視点を介し、後者と鏡像的關係に立つものである。従つて先に挙げた①②③項に一六世紀初頭(一五二二年以後)如何なる変化が登場したかという観点から、これを整理するのが簡便であらう。<sup>16)</sup>

① 国家儀礼と私的儀礼の葛藤―私的儀礼を超越せんとする国家儀礼と、互いに競い合いつつ国家儀礼を自身の内部に取り込もうとする各権門の私的儀礼の葛藤は、ここに至つてメデイチ家の家門儀礼による、共和国の儀礼の全面的吸収に依つて一応の止揚をみた。例えば共和国儀礼とメデイチ家門儀礼の癒着は、一五二六年奉行されたヌムール公ジュ

リアーノの葬儀が、共和国の公的儀典書『共和国儀礼の書』に記載された処からも窺えよう。多くの識者により、共和国から君主制への移行の儀礼面に於ける最終の様相と評される、一五三九年のコジモ一世の婚儀祝祭に至る迄、多数を数えるメデイチの家門儀礼の内、フィレンツェ儀礼史を画す意義を持ったのは当然乍ら、一五一五年レオー一世のフィレンツェ入城儀礼であった。この盛儀においてレオー一世は、ローマ/フィレンツェ二重帝国の皇帝/教皇の資格において、共和国が時の循環中反復される再生儀礼として維持し來つた、入城行列の原初の「聖なる城壁」(ローマ城壁)周廻の儀礼を、フィレンツェ世界のメデイチ家に依る唯一度の再開闢へと造り替えて了つと共に、世界創始者としての己が英姿をアウグストゥス帝「黄金時代」と接合させ、既に大ロレンツォ時代より準備されて來た、第二のアウグストゥスメデイチ家なる神話に、格好の視覚表現を提供したのである。<sup>17)</sup>

② 都市区分の党派的再編成―だが遙か後年六五年コジモ一世太子フランチェスコの婚儀祝祭迄、古城壁周廻といふこの革新された伝統は一時的に放棄される。尤もこの事實は逆説的に、この一五二二年(メデイチ復辟)から三七七

(コジモ一世即位)という時期の、過渡期的性格を如実に示すものでもある。レオー一世の入城以後記録される主要な入城行列としては、三五年のカル五世の入城行列、翌三六年の皇女マルゲリータ(アレッサンドロ妃)の入城行列、三九年のエレオノーラ・ディ・トレド(コジモ一世妃)の入城行列が挙げられるが、そのどれもトルナヴォーニ通り(古ローマ西城壁跡)からカルネセッキ通り(古ローマ

北城壁跡)の一部を除き、一五世紀初頭の歴訪諸君主や五年のレオー一世の如き、典型的な「城壁周廻」経路の採用を回避している。ベルテッリやピエトロサンティの見解を踏襲するマンティニは、この伝統逸脱型経路を「矢筋型」と分類し、都市に対する「征服者的姿勢」の儀礼表現だとする。<sup>18)</sup>この伝統逸脱型経路の特徴は、経路上の〈留〉たるべきランド・マークとして政府宮、警視庁等の旧共和体制有縁の地点を徹底して避け、メデイチ街区としてのサン・ジョバンニ街区、就中メデイチ宮の優越的地位を強調した点に窺える。かかる指向性の露骨な表出が、三九年の祝祭の行進経路に他ならない。この祝祭の経路は、大聖堂とメデイチ家の廟所たるサンティッシマ・アヌンツィアータ寺との連結道路として、威信を高め始めていたセルヴィ

通りを北上、上記サンティッシマ・アヌンツィアータ寺、サン・マルコ修道院を経、メデイチ大通りたるラルガ通りを南進、メデイチ宮に至るという独自の形態を示す。前記の如くこの一連のランド・マーク複合が、政府宮/大聖堂を中心とする中世都市の中心ランド・マーク複合と競合する、新都心としてのメデイチ街区の存在を誇示するものたる事は言を俟たない。<sup>19)</sup>

③ 宮殿の分布と造営数の増減—コジモ一世期に顕著になる都市空間の変容には尚論すべき点が多々あるが、それはむしろこの時期の「宮殿」を巡る諸問題との連関から論じた方が適当であろう。コジモ一世の婚儀に際し登場した「新経路」が、その太子フランチェスコの華燭以後継承されなかつた最大の原因は、メデイチが代々に亘って経営し続けたメデイチ街区としてのサン・ジョバンニ街区をコジモ一世期に放棄し、その居所がアルノ対岸ピッティ宮に遷座した点に求められる。旧メデイチ街区の放棄は、コジモがメデイチ傍系出身だったという事実以上に、共和政から君主政へという権力構造の変化に由来する出来事であった。今や絶対専制君主として国家大権を手中にしたメデイチと、組合及び街区選出官職の配分コントロールを媒介と

する、党派形成により権力を維持する「選挙基盤」としてのサン・ジョバンニ区の存在は、必ずしも不可欠なものではなくなっていた。勢力基盤としての街区乃至は「旗」からの離脱という現象は、一六世紀初頭から中葉にかけ単にメデイチのみならず、諸権門全般に見られた傾向である。

これら家門にとつても〈組合／街区〉を基本政治単位とした共和政体の最終的解体は、支持基盤としての都市内占有区画の意味の空洞化へと帰結した。

政治構造のこの変革を背景にコジモ一世は、フィレンツェの都市景観の根本的改造に着手する。そして彼の都市改造の結晶点を為したのが、公爵宮のメデイチ宮からピッティ宮への移転なのであった。既に一五四〇年公爵宮は政府宮へと移転していたが、この事件がメデイチ私権による共和国公権の全面的占拠を意味するに止まったのに対し、アルノ川により記号論的にも切斷された対岸へのその再移転は、〈公権そのものとしての私権〉＝絶対主義家産制国家という、新たな政治様式の誕生の都市論的兆候であり、フランス近代国家形成史におけるルイー四世のヴェルサイユ移転と、同質の意味を有する出来事であったと申せよう。リッチフィールド／マンティニが指摘する宮殿集中地域の都

市北東部（サンタ・クロッチェ区）からアルノ両岸地区（サンタ・マリア・ノヴェッラ区、サン・スピリト区）への移動現象も又、明らかにそれ自身形成途上にあつた「宮廷」の渡河と相関する現象に違い無い。勢力基盤としての街区を捨てた旧権門にとり、今や財貨と官職配分権を集中させた「宮廷」に出仕する以外、社会的身分の維持・上昇の機会は全く失われていた。この時期マッジョ通りから対岸へ渡つてトルナヴォーニ通り、カルネセッキ通りに至る範囲に数多くの宮殿が造営されたがこの地帯こそが、豪族から宮廷人へと変貌したフィレンツェ旧貴族たちの「山の手」を成したのである。

ところでトルナヴォーニ通りとカルネセッキ通りという経路が古ローマ城壁址＝神聖境界線として、フィレンツェ国家儀礼において極めて重要な地位を占めたことは先に言及した。コジモ一世はその治世に於ける代表的芸術作品の一つとも言える、アンマナーティ作の彫像に飾られた壮麗な石橋により、この神聖街路を対岸マッジョ通りと接合したが、それは単にこの地域に廷臣貴族たちを集住せしめる為だけではない。このカルネセッキ通りとトルナヴォーニ通り＝サンタ・トリニタ橋＝マッジョ通り＝ピッティ宮殿

という経路こそ、宮殿のアルノ南岸移転以後あらゆる祝典行列の通過すべき、メデイチ帝国の言わば〈凱旋道路〉として機能した。両側に林立する新廷臣達の邸第の壮麗が、この〈凱旋道路〉の輪奐の美を高めたのは勿論だが、マツジョ通りの終点／始点とも言うべきサンタ・トリニタ広場／サン・フェリーチェ広場の両所に、コジモがその治世を決定付けた二つの戦勝―モンテムルロの戦い「正義」とマルチャーノの戦い「平和」―を記念する戦勝柱を建立した呪術の意味からも推測される如く、伝統儀礼経路へのマツジョ通りの挿入は、都市ランド・マーク複合へのピッティ宮殿の参入に対する儀礼経路の側からの反応、逆言すれば守護靈力の根源たる聖なる結界Ⅱ古ローマ城壁からピッティ宮へと引かれた〈龍脈〉の開鑿という、メデイチ政権の〈靈的政治〉の次元をも担った企画ではなかったろうか。

V

ここ迄Ⅲ、Ⅳと些か纏りの無い記述に終始して了った。実を言えば気軽に取り組み始めたこの書評、稿を進める内その難しさに根負けする思いに捉われたこともしばしばであった。先ず第一、種々雑多な素材が緩やかな連鎖を成し

て次々と登場する本書の構成が、簡にして要を得た整理を拒み続けたことが気に掛かる。先立つ両節を費やし本書の内容に関し、一応の個別具体的例示をした心算ではあるが、極多数の素材の何十分の一かを恣意的に選別し、本書を貫く論旨についての自分好みの文脈を創作して了った恐れ無しとはしない。もっとも多少言い訳めくが、こうした整理手法を採らねばならなかったことに於いて、本書の欠陥が如実に露呈している如くにも思われる。確かにマンティニがフィレンツェ史の広範な領域に亘り、師ベルテッリ更にはトレクスラー、ブラッカー、ゴールドスウェイトやケント、リッチフィールド等巨匠の業績を猥渉し、その最も旨味ある部分を掬い出しつつルネサンス・フィレンツェの儀礼空間を巡る、使いでのある小辞典―手引書を編纂した力量は高く評価されてよい(本書公刊当時イタリア人史学生の評も一様に好意的なものであった)。恐らく本書一冊の精読は、先行する同分野の書物数冊分の知識情報を読者に供給してくれる筈で、その点に於いて欧米文献処理能力につき、不可避のハンディキャップを負う日本人研究者、就中将来の個別研究の基盤となる根底的知識を手早く身に付ける必要に迫られている、学部後期から大学院前期の時



期の志学者にとり格好の入門書には違い無く、評者が敢えて本書書評の筆を執った理由も正にそこにあった。

だが裏返して見れば小百科としての本書の長所が、同時に短所にも変わり得る。先にも触れたが上手なパッチ・ワークは、上手なパッチ・ワーク以上のものにはなり得ない。

ある学者の書物からは大理論が、ある学者のそれからは中理論が、ある学者のそれからは具体例が次々と引用されるものの、少なからぬ箇所においてそれら相互の相関性が極めて曖昧にされているため、当初評者が「文脈」と目星を付けそれに沿って読解を進めて行った〈筋〉は、しばしば袋小路に陥り或いはあらぬ方向へと逸脱し、一六世紀イタリア文化さながらの迷宮状態の中、本書を一体如何に理解すればよいのかと頭を抱え込んだりした。そもそもこの様なパッチ・ワーク傾向は一人マンティニーのみならず、ベルテッリに始まりピエトロサンティ、カシーニそしてファントーニ等、ベルテッリ周辺の人物の著作に共通して窺える奇妙な傾向である。夫々の論者が夫々に興味深い仮説乃至は素材を見付け仮説の場合には実証へ、素材の場合には理論へ向けて考察を開始するにも関わらず、彼らの著作に於いて考察は、〈問い／答え〉型の明晰な叙述構成へと整

序されるに至らず、暫らくの展開の後まるで子供が玩具に飽きる様に投げ出され、次の全く別の論題の考察が始まってしまう。ベルテッリ門下の著作に極端に露呈するこうした傾向は、イタリアの人文著作全般にみられる欠点とも見做し得る。日本人研究者の「情緒的」論文は、アングロ・サクソン系研究者に、趣旨不明・没論理の悪文の評されることしばしばであるし、実際そうした批評がある程度正鵠を得たものであることも間違いない。それにも関わらず欧州論理文化の源流に位置する筈の、イタリア人文学の選良達の論文構成の没論理性は奇妙と言う他は無い。形容詞の反復重層による誇大な形容、ピントがどこか外れた比喻の洪水に付き合うことは、時間の浪費以外の何物でも無かる。イタリア知識人の文体のこうした傾向が、イタリア語という言語そのものの特性に由来するものか、修辞重視という宮廷人文主義の悪しき残滓に由来するものなのか、暗記重視のイタリア大学教育の欠陥に由来するものなのか、精通者の教示を請いたいとすら思っている。勿論典型的イタリア文人の頭の中には、単純単線型論理に慣れ切ったアングロ・サクソン系知識人には思いも寄らない、分散多線論理が存在しているのかも知れないという疑いは残るし、

私がベルテッリやマンティニーの著作を読んで感じる消化不良感も、結局はアングロ・サクソン・スタイルに依る文化の「世界標準」化を通じ、ラテン的な分散多線論理を了解する知能を失ってしまった、私自身の単純化に起因するだけの事なのかも知れない。

幾分脱線したが、ベルテッリ門下の俊秀達の著作に見られるこうした傾向の一因は、頭の回転が速く短期的に集中した後さらりと関心の対象を変えて了うという、評者が知人から間接的に聞く処の、ベルテッリ教授自身の性格にも存するように思われる。卒業論文に四年五年という歳月を費やす、イタリアの現行大学制度に於いてアカデミックな徒弟制は厳存しており、性格的に相性の悪い学生が或る教授の下で学業を終了することは非常に困難である。かなり極端な人物だったらしいベルテッリの下に集ったのがマンティニーを含め、頭の回転の速さとそれとは裏腹な粘着心の無さで特徴付けられる、才人肌の人物に限られていた可能性は想定し得るし、ベルテッリ流のスタイル自体、そうした雰囲気の中で生まれた自然の産物だったのかも知れない。

ここ迄「ベルテッリ流」に対する不満を、マンティニー

の著作を切り口に色々並べ立てて来たが、素材並列的な彼らの著作の様式が、都市空間や儀礼に関する今日の研究の水準を、端的に反映したものであることを無視しては片手落ちであろう。フランス・アナール派社会史の影響等から、都市空間や国家儀礼がイタリア史学界の関心に入ってきたのは、高々この一〇年程度の事に過ぎない<sup>23</sup>。この主題に関しては言ってみれば今日も尚、日々フィレンツェをはじめ各地の文書館に眠る関係資料が、発掘・整理され続けている段階なのである。このような状況において歴史家の為すべき仕事は、過去の儀礼空間に関する「民族誌」の網羅的収集と、直観的な仮説作りに集中せざるを得ないのは止むを得ない。取り分け一六世紀の儀礼と社会に関しては、本来残存する史料数が限られ、かつ断片的であるが為に、余程洗練された方法論を練り上げない限り、個別の祝祭の具象性を十分掘り下げつつ、そこから儀礼空間の社会構成上の機能をめぐる一般的結論を導出するのは至難の業に違いない。その様な方法論が構築され得る為にも、儀礼／空間の「民族誌」が新進研究者の接近し易い形で（年代、地域分布、様式、性格、主体など様々な観点から整理された上で）集積される必要がある。今回批評したマンティニー

の作品を含め、ベルテッリ学派は「民族誌」のかかる集積にあたって、極めて価値ある業績を成し遂げた。だが評者の懸念するのは、この学派の手法がここ暫らく固定化し始め、「民族誌」集積に自足する傾向を見せかかっている点に他ならない。如何なる歴史家も最早嘗ての如き素朴実証史学者に止まることを許されなくなった今日、方法論の問題は歴史家にとって揺るがせにし難い問題であるが、限られた史料読解能力と限られた史料接近可能性とを運命付けられた我が国西洋研究者にとっては、如何なる方法的立場に立つのかの自覚的追求は、研究の成否を決する肝要事であるとすら断言し得る。ベルテッリとその門下生達が目下の「民族誌」的段階を克服し、歴史叙述における個別／＼一般の均衡を見事に表現する、模範的なモノグラフィ―を世に問い、それを通じて我々日本人研究者も依拠するに足るが如き、理想的研究方法論を提示してくれる日の到来を期待しつつ、この書評を擲筆したい。

## 註

(一) フローニ教授の近著として R. Fubini, *Italia quattrocentesca-politica e diplomazia nell'età di Lorenzo il*

*Magnifico*, Milano 1994 を挙げておく。取り分け同書所収の論文 II regime di Cosimo de' Medici al suo avvento al potere は、それ以前授業理解の爲熟読した教授の論文、La rivendicazione di Firenze della sovranità statale e il contributo delle (Histriae) di Leonardo Bruni, in *Leonardo Bruni: cancelliere della repubblica di Firenze*, Paolo Viti ed., Firenze 1990 と併せて、筆者のメデイチ政権観を大きく転換させた好論文である。

(二) チプリアーニ氏の仕事に関しては歴史人類学会『史境』三五号に、その論文(メデイチ家の政治イデオロギーとエトリアの「再生」)の翻訳を解説文と共に掲載したので、同解説文を参照されたい。

(三) ベルテッリ・グループの主要著作としては以下の作品がある。

S. Bertelli, *Il corpo del Re: sacralità del potere nell'Europa medievale e moderna*, Firenze 1990.

*Gli occhi di Alessandro: Potere sovrano e sacralità del corpo da Alessandro a Ceausescu*, S. Bertelli, C. Grottanelli, eds., Firenze 1990.

S. Pietrosanti, *Sacralità medicee*, Firenze 1991.

- M. Casini, *I gesti del principe-La festa politica a Firenze e Venezia in età rinascimentale*, Venezia 1996.
- (4) *Gostanza: La strega di S. Miniato*, F. Cardini ed., Roma, 1989.
- La Notte*, M. Sbriccoli ed., Firenze, 1991.
- Rinascimento al femminile*, O. Niccoli ed., Roma, 1991
- (5) R. C. Trexler, *Public Life in Renaissance Florence*, Ithaca-London, 1991.
- G. A. Brucker, *Renaissance Florence*, New York 1969.
- G. A. Brucker, *The Civic World of Earl Renaissance Florence*, Princeton 1977
- U. キーリン『ヌガラー—19世紀パリの劇場国家』(小泉潤一訳) ちくま書房 一九九〇年。
- (9) R. A. Goldthwaite, *The Building of the Renaissance Florence: An Economic and Social History*, Baltimore London, 1970
- (7) この様な問題についての一般理論的展望は、M. エリアーデ『永遠回帰の神話—祖型と反復』(堀一郎訳) 未来社、一九六三年
- 同 『聖なる空間と時間』(久米博訳) せりか書房、一九八一年
- M. Fantoni, *La corte del Granduca: Forma e simboli del potere mediceo fra Cinquecento e Seicento*, Roma, Bulzoni 1994 (この書物に關しては北田葉十氏による明晰な書評『イタリヤ学雑誌』三十五号所載—がまろ) 又建築史という特異な立場からルネサンス期の儀礼空間研究の先駆を成した。M. フォンシエーロの業績にも注目した。
5. M. Fagiolo, *La città effimera*, Roma 1980.
- 尚イタリア国外の関連研究としては後に取り上げるマレンツァラーの著作の他、E. ムーアの業績 E. Muir, *Civic Ritual in Renaissance Venice*, Princeton. 1981 が、フレンツェ祝祭政治の解釈にあたっては極めて重要。又メディアチ宮廷祝祭そのものを扱った演劇史的個別研究として、J. M. Sallow, *The Medici Wedding of 1589*, Newheaven-London 1996 が近年公刊された。その他メディチの文化政策に関する美術史・演劇史の分野の欧米文献は、汗牛充棟ここに紹介する余裕はない。ただ高階秀爾『ルネサンスの光と闇—芸術と精神風土』中公文庫、一九八七年は、この分野における邦語の入手し易い貴重な文献として、ここに

イーノー・トゥマン『空間の経緯』（山本浩記）さへ共著  
文庫、一九九三年

等に提示されている。

- (8) マンティーニの記述の典拠は恐らく、Testaverde, La decorazione festiva e l'itinerario di "rifondazione" della città negli ingressi trionfali a Firenze tra XV e XVI secolo, in "Mittelungen des Kunsthistorisches Institut in Florenz", XXXII, 1988, 3, pp. 323-352 を参照。

(9) 原書二七頁―三八頁

古代都市の城壁観念についてはJ・リクワート『へまち〉のアイデア』（前川道郎・小野育雄訳、みすず書房、一九九一年）の記述が参考となる。

中世都市における城壁の聖性に関しては Bertelli, op. cit., pp. 67-84 が種々の考察を加えている。マンティーニの記述も当然ベルテッリの考察に沿ったものである。

(10) 原書二九頁―四四頁、五九頁―六三頁

拙稿「フイレンツェ、一五一四年の聖ヨハネ祭―ルネサンス祝祭における秩序と逸脱」（岩波書店『思想』八七六号、一九九七年、六三頁―八四頁）をも参照。

(11) S. T. Strocchia, *Death and Ritual in Renaissance*

*Florence*, Baltimore-London 1992.

(12) 原書八三頁―八八頁

(13) 原書一一頁―一一六頁

(14) 原書一一九頁―一二二頁

(15) 都市内の主要聖堂（S・クロッチェ、S・マリア・ノウェッラ、S・マルコ、S・S・アマントゥィアータ）が、都市起源神話のもうひとつの聖なる参照点ポンテ・ヴェッキオの起点を中心とした、円弧上に整然と配置されていることについては原書一四六頁―一四七頁。政治権力のネットワークと同心会に関しては一四七頁―一四九頁。又都市守護のための「聖なる供物」たる修道女達を收容する女子修道院が、宛ら門という結界の弱点をその靈的エネルギーで補強するが如く、都市を外部と繋ぐ主要城門に至る各街路（ピンティ街、サン・ガロ通り、現在のプラトー門並びにローマ門周辺区域）に沿って意図的に配置されたことについては、原書一五一頁―一五二頁を見よ。

(16) 宗教的ランド・マークの分布を取り扱う④に関しては第2部第2章の場合、これを「君主教」という新たな世俗宗教の靈祠としての、メディチ君主の胸像・騎馬像の分配配置戦略を扱う節（「撒き散らされた〈聖性〉：君主の騎馬像

と胸像」が、これ又鏡像的に代行している。寡頭共和制と盛衰を共にした「インブルネータの聖母」崇拜が、メディチ君主制成立後次第に忌避抑圧され、代わってメディチ家と一心同体とも評せるマリア下僕会の「アマンツィアータの聖母」が上下の礼拝の的となったと同様、メディチ君主制のカリスマ性強化に従って、従来都市各地に散在したキリスト教的諸施設（修道院・同心会・小祠堂）に代わり、「撒き散らされた」帝王像が君主礼拝の布教所となって行くのである。

(17) 原書一九五頁—二〇二頁。前掲拙稿も参照された。

(18) 「直線型」入城経路については Bertelli, op. cit., pp. 69-73.

Pietrosanti, op. cit., pp. 17-39.

(19) この時期における行列経路の変更については原書二二三頁—二二五頁。Testaverde, op. cit., p. 342 の図表も有用。

(20) 原書二二七頁—二二九頁。

マンティニが典拠とした著作は B. Litchfield, *Emergency of Bureaucracy: the Florentine Patricians 1530-1790*, Princeton 1986 である。

(21) 原書二二三頁—二四四頁。取り分け二四三頁の図表。

(22) 原書二五二頁。

(23) 一般にイタリア系及びアングロ・サクソン系の研究の影に

隠れ、注目されることが少ないがアナール社会史直伝の問題意識を受け継いだ、フランスの研究も又メディチ・フィレンツェ儀礼空間研究上独自の位置を占めている。特に今後注目して行かなければならないのは、民衆心性史的アプローチに特徴をもつ、M・ブレイザンスを中心とするグループの動向である。彼らの主な業績を例示する。

M. Plassance, Une premiere affirmation de la politique culturelle de Côme 1er, in *Les écrivains et le pouvoir en Italie à l'époque de la Renaissance*, A. Ronchon ed., Paris 1973.

— Culture et politique a Florence de 1542 a 1551, in *Les écrivains et le pouvoir en Italie à l'époque de la Renaissance*, A. Ronchon ed., Paris 1973.

— La politique culturelle de Côme 1er et les fêtes annuelles à Florence de 1541 a 1550, in *Les fêtes de la Renaissance*, 3. ed., J. Jacquot, Paris 1975.

— Florence: le carnaval à l'époque de Savonarole, in *Les fêtes urbaines en Italie à l'époque de Renaissance*, F. Decroisette et M. Plassance eds., Paris, 1994.